

---

# 不可死の魔王

ネコノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不可死の魔王

### 【Nコード】

N4451Z

### 【作者名】

ネコノ

### 【あらすじ】

ごく普通の高校でごく普通の生活を送る村上<sup>かすや</sup>一弥は平凡な生活に嫌気がさしていた。そんなある日、斉藤と名乗る謎の人物と出会う。斉藤に手渡された謎のディスク。それは異世界への通行証だった。ゲームのような異世界をクリアすると何でも望みが叶うと言う。そのディスクを使い一弥はゲームのような異世界へ向けて旅立つ。その世界で与えられた適正職業はなんと『魔王』だった。そして、そのゲームのクリア条件は魔王を倒す、つまり自分が死ぬことが条件だった。

## プロローグ

自分の根城から少し離れた広大な草原の中。

剣の大きな一振りが周りの異形の魔獣を蹴散らした。

その衝撃波は多くの魔獣を紙きれのように貫いていく。

衝撃波の目標は俺だ。

とっさに剣を構えて衝撃波を受け止めた。しかし、反動は殺しきれず大きく後ろへと吹き飛ばされ、地面に背中を強打する。

起き上がらなければ負ける……

吐き気がこみ上げるのを堪えて立ち上がり、再び剣を構えた。

目の前のモンスターは次々となぎ倒され、やがてその人影は目前に迫る。

くる！

一太刀、二太刀と刃が迫るのを剣で受け流し、大きく後ろに下がった。

「あなたが魔王ね？」

襲いかかってきた敵はそう尋ねた。女の声。

目を上げると、150？ほどの小柄な少女が睨みつけていた。

彼女は赤い髪を風になびかせながら、アーマープレートは太陽の光を眩しく反射させて輝いていた。

この問いに答えるのは何度目だろうか……

「ああ、そうだ」

無愛想にそう答え、剣を構えた。

「あなたを倒せばこの世界は平和になる」

平和になろうと何だろうと、負けるわけにはいかない……。

負けたくない……

僕は……、僕は死にたくない……

彼女は剣を構え、飛び込んでくる。

はい！！ 彼女の太刀を受け流しながら、後ろへと後退した。はやくて見えない。このままじゃ……

かろうじて受けきっていた。しかし、対応しきれなくなり、やがて剣をはじかれた。

剣は手を離れ勢いよく回転しながら少し離れたところに突き刺さる。

そのまま体勢を崩し大きく地面に倒れた。

彼女はすかさず体にまたがり、刃を首へと押しあてられる。

「私の勝ちよ。観念しなさい！」

この状態からは逃げることは出来やしないだろう。

彼女の言うとおりこれで終わる。

結局、僕は死ぬのか……。

「これで終わりよ！」

目を瞑り、すべてをあきらめた。視界は消え、暗闇の中ただ祈った。

## 1 - 1 「現実とファンタジー」

「う、うわああああ」

慌てて覆いかぶさるものを押しつけて起き上がった。

押しのけたものを確認……………布団か。

視点を辺りに移し見渡した。

いつもの自分の部屋。

「夢か…………」

荒い呼吸を落ち着かせた。

すでに、どんな夢だったのかすら覚えていなかった。ただ

「僕って精神的に不安定なのかな？」

ここ最近、悪夢を見ることが多い気がする。

ジリリリリリリリリ！

大きく目覚まし時計が鳴りだす音。

時間だ…………。目覚まし時計を止めて、ベッドを下りた。

ハンガーに掛けられた制服に素早く着替えて家を後にした。

いつもと同じ風景の中、高校へと向かった。

はあ…………。夢のせいかな何度もため息がでてしまう。

2学期が始まって間もない時期、あとどのくらい行かなければいけないか考えただけでも憂鬱な気分になってしまう。

学校が退屈でたまらなかった。特にやりたいことがあるというわけもなく、友達はいないこともないが、特別親しいこともない。

こんな空虚な毎日を抜け出したいと何度も思った。自分だけ周りと違う時間を生きているような感じだった。この世界には向いていない。

厨二といわれればそれまでだけど、何かみんなと違う気がした。

教室に入り、挨拶をすれば

「おはよう一弥」

と友人も同じように返答をしてくる。当たり前前の反応だけど、どこか機械的で冷たく、友好関係もそんなものだった。

授業が始まり、特に学びたいと言ったこともなくただ時間が過ぎる。放課後になれば、何の楽しみがあるというわけもなく帰る。友人と遊ぶ時でさえ、ただ付き合ってるような感じさえする。

ほんとに僕って駄目だな……。

自覚がないわけじゃない。でも僕にとってこの世界はつまらなく感じた。

今日も一人で帰路についていた。

「はあ、何か」

「世界が変わるような面白いことがないかな、ですか？」

ふとつぶやこうとした時、後ろから誰かの声が聞こえた。それは僕が考えていた言葉そのもの。そして、聞き覚えのない声に慌てて振り返った。

そこには声の予想通り見たことのない男が立っていた。男と目が合い男が話しかけてくる。

「こんにちは」

男はシルクハットの帽子を手で脱ぎ、まるで中世貴族がとるようなお辞儀をする。

格好はシルクハットにタキシード、顔は真っ白でサーカスのピエロのような顔。どこからどう見ても変質者にしか見えない風貌だった。

「……………」  
もちろん、こんな変な人間と会話する気などなかった。会話どころか関わりたいとも思わない。逃げようか……。

「あまり元気がありませんね。それともただの無口なのか……、っ

「てちよつと!」

男が話を終える間もなく全力で逃げた。

ある程度の距離を走り、息を切らし、後ろを振り返る。

男は いない。追ってきてないようだ。

「いやー、急に走り出すからびっくりしました」

後ろから聞こえる声、その声に慌ててとびのいた。

「お、おまえ……」

後ろには先ほどの男が何事もなかったかのようにたっていた。

「おどろかせてすみません。あなたにとって良い話を と思いまして」

「良い話?」

逃げてても無駄な気がしたのでとりあえず話だけ聞くことにした。

「ええ、あつと、申し遅れました。わたくし斉藤と申します。以後お見知り置きを……」

お見知り置きと言われても今後関わりたくないけど……。

「その斉藤さんが何か用でしょうか?」

斉藤と名乗る男は気づかないぐらい一瞬でぐつと顔を近づけ

「はい、おめでとございます! あるゲームの参加者にあなたが選ばれました!」

「参加者選ばれた? 僕は別に何も知らないけど……」

もちろん、話を聞いたこともなければ、そんなものに応募なんてした記憶もなかった。

「はい、今初めて話しましたので、それは当然かと」

斉藤と名乗る男は当然のように言った。

「応募とかもしてないけど?」

「はい、それはいいりません。あくまでこちらで資質があるか厳選しているだけなので」

「厳選?」

「すべては言えませんが、世界が変わるような面白いことに当ては

まります」

「……………？ どういうことですか？」

「それはですね、先ほど申しましたあるゲームというのは異世界を疑似体験できるというものでして、あなたのような方を探していました」

シミュレーターみたいなものかな？ なんにしても馬鹿にされる気がするけど…………

「そ、そんなものは」

男は一枚のCDを取り出し、目の前に着きだしてくる。

「これがあれば、あなたの望みがかなうかもしれませんよ？」

「の、望み？」

「はい、思うがままに」

本当に叶うのだろうか？ いや、そんなわけではないと思う。詐欺か？ もしくは頭のおかしい人の類。どちらにしてもこれ以上、関わるわけには…………

「い、いらないので僕はこれで！」

CDを持つ男の手を振り払い、走った。

家はすぐそば…………。全力で家まで走りドアに鍵をかける。

こ、これで大丈夫…………。大きくきらした呼吸を整えようと深呼吸をした。

それにしても変なひとだったなあ…………。

男の言っていた事を思い出した。望みが叶うか…………。

「望みが本当に叶うならいいけどね」

でも僕の望むことなんて叶わない事は分かり切っている。いや、誰もが抱く望みが叶うこと自体が少ないだろう。そんなうまい話があるわけない。

「叶いますよ」

再び男の声、そして目の前に現れ、驚きのあまりその場で崩れた。「な、なんで！？ ど、どうやって入っ」

何が何だか分からない。ドアのかぎを閉めたのに、家の中にいる



ことも不可解だが、何より不可解なのは男は逆さ　　つまり、天井から逆さに吊る下がったような格好だった。もちろんロープのようなものは見当たらなかった。

「う、浮いている!？」

「はい。このぐらいの事ならなんとでもなります」

「ゆ、幽霊なの？」

「んー、幽霊ではありませんね」

少なくとも人間には思えなかった。まだ、僕は夢でもみているのか？

男はこちらの反応を気にもせず、話し始める。

「どうでしょう？　参加しませんか？　クリアが条件ですが、あなたの望みは叶います」

「望み……………」

「それに、この世界が嫌いでしょう？　参加するだけでも損はないと思いますか？」

親とも大した会話もなく、友人ともさほど親しくない世界。

「少しでも現状が変わるなら…………、参加したい」  
偽りのない本音だった。

男はにやりと不気味な笑みを浮かべ

「承知しました」

再びCDを目の前にかざす。

すると、男の目は光り出し、共鳴するかのようにCDも光り出した。

CDからはルーンだろうか？　模様が浮かび上がる。

「このCDが参加証になります。パソコンかゲーム機にこれをいれてTV画面を見ていただくだけで大丈夫です。参加後、取り消しはできませんのでご注意ください。なお詳しい説明はゲーム画面がしてくれますのでそちらで…………」

CDの光は大きくなり光に包まれた。

## 1 - 2 「現実とファンタジー」

眩しく光って……。そのあとどうしたんだっけ？  
目を覚ますと玄関に寝そべっていた。

「夢……？ だったのかな？」

寝そべった体を起こし立ち上がると、何かが地面に落ち音を立てた。

CD？

さつき見たCDだった。ひよつとして夢じゃない？

「そうそう、言い忘れました」

「わっ！！」

夢だと思っていた男の声に再び大きく驚いた。

「どうかしましたか？」

「い、いや別に……」

「そうですか。あ、そうそう、言い忘れていたのでひとつだけ。私はこちらの世界で名前を読んでいただければ現れますので」

名前を呼べば現れるって……。やっぱり人間じゃないよね。

「それでは失礼します」

そういつて姿が消えていった。

そのまま数分、茫然と立ち尽くした。

CDか……。

部屋にあがり、着替えながら考えていた。

疑似体験がどうのって言ってたよね。ゲームらしいけど……。

普通なら信じないけど、あんなの見せられたら……。

疑惑を浮かべながらも、好奇心が勝っていた。

CDを取り出し、パソコンに入れる。

インストール開始ボタン。普通のパソコンのように進んでいた。そして、プログラムを起動した。

すると、画面は真っ暗になり、何も浮かばなかった。数分ほど待っても何も起きる様子はない。

「なんだ、やっぱり嘘か」

『プログラム確認。ユーザーID確認』

PCから聞こえる音声。

『プレイヤーの脳内に埋め込んだIDと一致。転送します』

「え？ な、なに？」

一瞬でPC画面から暗闇のようなものが現れ、体を包み込み、視界がブラックアウトした。

「んっ……、こ、ここはどこ？」

自分の体は目視できるが、辺りは暗闇そのものだった。

自分の足は暗闇の中だけど、地面らしきものについていた。

『ようこそいらっしやいました』

女性の声。しかし、真っ暗でどこにいるのかさえ分からない。

『世界でのルールを説明させていただきました』

これは、ゲームの中にはいったのだらうか？

『まずはゲーム内の名前を決めていただきます。その後、あなたの思考から適性の職業と設定へ導かせていただきます』

ゲーム内の名前かあ……。

『では名前をお決めください』

んー、悩むけど、どうせならカッコいい名前がいいよね。

「ランスロットー！」

『ぶっ！ そ、そういうのはちょっと……』

名前の拒否。　っというかいま確実に笑ったよね？

「うーん、それじゃあ、ロイヤルフォーエンバッハで！」

しーんとしていて返答が返ってこなかった。

「あの……」

『はい、どうしましたか？』

「ロイヤルフォーエンバツ八でお願いできますか？」

『まずは適性を見させていただきますね。それに適した名前をこちらで』

ええええええ！？ む、無視？ しかもどことなく怒っているような声。

しばらくたち、再び話しかけてくる。

『できました。あなたの適性は』

いったいどんな職業だろう。剣士？ 魔法使とかもおもしろそう。

次の瞬間、驚愕の一言。

『魔王です』

「魔王かあ。つて、ええええええ！？」

『あなたは魔王ツヴァイに決められました』

なんか名前までいつの間にか決められてるし……。

「変更できませんか？」

『できません』

即答だった。

『では続けます。まずプレイヤーは現実時間の1週間経つと1日だけ現実に戻されます。その間は時間は経っていないのでご安心を。

注意しなくても良いですが、現実の個人情報に関することは禁止用語としてしゃべることはできません。それと現実世界でも機密保持のため他言無用となります』

こんなもの、現実で一言も聞いたこともなかったし、こういうところで機密漏えいをふせいでいたのだろう。

『次に通貨についてですが、ブロンズ、シルバー、ゴールドという単位になります。百枚で単位が繰り上がります。お金はアイテムを売るか、クエストで稼ぐか、もしくは何か仕事をして稼ぐことが基本となります』

この話の一つ大きな疑問が浮かぶ。

「ねえ、魔王はどうやって稼ぐの？」

『知りません。自分で考えてください』  
投げやりな一言。それでいて怖い。

「そ、そうですか……」

『次に最後となりますが、このゲームを完全に終わらせるには条件があります。それは、死ぬか、クリアするか、の2通りとなります』

「クリア？」

『はい、魔王を倒すことがクリア条件となります』

「魔王って……、僕が倒されるってこと？」

『そうなりますね。クリアすれば報酬として現実世界で望みが一つ叶うと言つ特典もありますのでがんばってください』

「ど、どうやって!?!? 他にクリア方法ないの?」

『ちっ……。そういうのはありませんので』

いまあきらかに舌打ちしたよね!?

「ね、ねえ!」

しかし、その言葉は通らず

『詳しい事はパーソナル端末にあるのでそちらで。それでは転送いたします』

「ちよ……、ちよつと!」

言葉は空しく、再び視界が光に包まれ、フェイドアウトした。

1 - 3 「現実とファンタジー」

次の瞬間、目に眩しく刺す光。なかなか目をあけられない。僕はどこかに転送されたのだろうか？ お尻と腰の感覚。これは椅子に座っているようだ。

少しずつ目を開いた。

明るさに慣れ、視界が開けた。そこは大きな石造りの部屋？そして目の前には一人の女の子が立っていた。

見た目は幼く、銀髪。そして、驚くべきは

「み、耳が……」

思わず口にした。これはまずったと思った。しかし、女の子は表情を変えず

「耳？ あー、はい、エルフですから」

エルフの耳、その単語を聞いて現実から離れた世界だと実感した。「き、君は？」

「申し遅れました。魔王補佐官のシャディです」  
無表情ながらも丁寧にお辞儀をした。

へー、魔王を補佐するのはこんなかわいらしい子か。しかし、A Iにしてはしっかりしているなあ……。

この耳、どんな感じになっているのだろうか？  
シャディに近寄った。

「あ、あの……？」

返事に答えず耳に触れた。

「へー、エルフの耳ってこんななんだ。よくできているなあ」  
「ひゃっ……。んっ……。あっ……」

シャディは色っぽい声を上げ、その声にどきっとして慌てて手を離した。

次の瞬間、目の前に足が

ぐふっ！

蹴りによって大きく後ろへ吹き飛び腰を打った。

いてて……。目を上げ上に視線をあげると、シャディが目の前に立ち鋭い目つきでにらみつけてくる。

「いきなり失礼ですね。セクハラで訴えられたいのですか？」

訴えるってどこに！？　　とそれはともかく

「ご、ごめん。めずらしくてつい……」

シャディはあきれたようにため息をつき

「別の世界でも、他のプレイヤーに触れれば立派なセクハラです。

気をつけてください」

え？　プレイヤー？

「ぶ、プレイヤーだったの！？」

シャディはじろりと睨みつけ

「他に何だと思ったんですか？」

「魔王の配下だから、てっきりNPCかと……」

普通は魔王の配下にプレイヤーが混じっているなんて思わないと思う。

「確かにモンスターのほとんどはプレイヤーはいませんが、一部の魔族はプレイヤーです。ほぼ半ば強制的になっちゃったわけですけど」

そっか、この子も……。

「何にしても次から気をつけてください。次は命の保証はできませんので」

「は、はい……」

ご、ごわい……。

「つと何はともあれ、よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

なんか怖いけど、悪い子じゃなさそうだ。

そして、再び辺りを見渡した。どこかの城の一室。王の広間のよ

うな間取り。

他の人間どころか、モンスターすら出てくる気配がないほど静かだった。

「ここは何か……、すごく静かだね」

自分の声が大きく反響した。

「ええ、私とあなたしかいませんから」

「えっ！？ 他に誰もいないの？」

「はい」

普通は、モンスターや配下の部下たちがいるはずだけど……。

「あのさ、僕って魔王だよな？」

「ええ、そのはずですが？」

彼女はそっけなく答えた。

「普通はもつと配下の魔族とかモンスターとかいると思っただけど……」

「はい、前はたくさんの方がいましたが、私以外の方は全員城を出ていきました」

「な、何で!？」

「主がない城にいても収入になりませんから。みんな生活がありますから……」

「そ、そっか」

「何だか傭兵みたいな魔王軍だ……。想像していた魔王とずいぶんと違う。」

「何だか不服そうですね？」

「い、いや、想像していたのとずいぶん違っていたから……」

「あ、そういえばこの子は……」

「き、君はなんでここにいるの？」

「この子もここにいる理由はないはずだ。」

「私はここが住みやすいから残っているだけです」

「そ、そうなの……」



「あと、言い忘れていましたが、私はあなたの配下でも召使でもないので、侵略やその他の生活は自分でなんとかしてください」

「え？ 魔王補佐官って言ってたような……」

「それはここに来た時の役職の話です。別にあなたに雇われているわけではありませんし、お金を持っているわけではないでしょ？」

「うっ……」

最初に所持金を渡されていないか確認したが見当たらなかった。

「自給自足です」

「あ、あのだ」

「何でしょうか？」

「僕って本当に魔王なの？」

「はい、そのはずですよ」

「……………」

シャディはそう言って部屋を後にした。

静かな部屋の中一人たたずむ。

石造りの部屋に冷たい風が吹き込み、身震いをした。

辺りはすっかりと暗くなっている。

もう夜かな？ なんだか、お腹もすいたし……。

香辛料の効いたいい匂いが漂って来ているのを感じ取り、余計に空腹を刺激した。

あの子が作ってるのかな？

匂いに釣られて、匂いのある場所へと足を運んだ。

ここはキッチンかな？

いかにも中世の漫画やゲームで見るとようなキッチン。

そして、そこに銀髪の少女の後姿があった。

スープのおいしそうな匂いがキッチンを漂う。

「何の用ですか？」

シャディは物音に気付いたのか振りかえって言った。

「い、いや、お腹がすいたので何か食料はないかと……」

「残念ながら保存食はありませんよ？　ここにあるのは私の買ったものだけです」

「そ、そっか……」

どのぐらいの時間人がいなかったのかは分からないけど、シャディ一人しか住んでいないなら当然だった。

お金なんてもってないし……。外に出て探すにも、日は暮れてる上に土地勘はまったくくない。

食べ物一つありつけずにいるなんて、本当に魔王なのか疑わしくなってきた。

空しくお腹だけが鳴った。

うう、情けない……。

「はあ、しょうがないですね。一緒に食べますか？」

シャディは見るに見かねたのか、そう言ってスープの入ったお皿をさしだしてきた。

「い、いいの？」

「はい、ものほしそうに眺められるのもかなわないですし、それに一人より二人の方がご飯がおいしいですからね」

「あ、ありがとう」

シャディが天使のように輝いて見えた。いや、魔族だけど……

「ただし！　明日から働いてもらいます。働かざるもの食うべからずです」

「うん、わかった。君の期待にそえる仕事ができるかはわからないけど、がんばるよ」

「君じゃありません。シャディでいいです」

「シャディよろしく。僕はえっと……」

オペレーターに言われた名前を思い出し

「ツヴァイ」

「ツヴァイ……ですか……」

シャディは怪訝そうな顔を浮かべていた。

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません」

意味深なシャディの対応に疑問に思ったが、立ち入ることではなかった。

「そっか」

「それより冷めてしまう前に食べましょう。明日から私の雑用をしてもらうつもりなので覚悟してください」

そう言い、シャディは手を合わせてから料理に手をつけた。

「ねえ」

「何でしょうか？」

「僕って本当に魔王なんだよね？」

「ええ、そうです」

これじゃあ、どっちが魔王かわからない。でも、とりあえずは食べ物にありつけるだけいいかなと思った。

食事を終え、空き部屋の一室で眠りについた。

## 2 - 1 「デスペナルティ」

この世界へ来てからちようど3日がたった。この世界にきたあの日、半ば強制的に『魔王』にされた。やりたくないと思っただ、この城に来て、魔王も悪くないかなっとも思った。でも

「これはなんか違う気がする……」

手にはモップを持ち、城の床を掃除していた。いや、させられていた。

「そこ、さぼらないでください」

「はい……」

シャディの一言に、ただうなづくことしかできなかった。

「はあ、なんで掃除なんか……」

などと時折、口にするが、逆らうことはできない。なんていったって

「ご飯をいららないのでしたら、しなくてもいいですよ？」

食事抜きにされてしまうからだ。

さすがに、外に出て稼ぐことも、狩りをするのも僕には無理だから必然的に

「すみません。掃除をやらせていただきます」

深々と頭を下げた。

すっかり上下関係が出来上がってしまった……。

「働かざるもの食うべからずです」

そう言っつて、シャディは自分の作業へと戻って行った。

本当に魔王なのか疑問に思えてきた……。

しかし、彼女の言うことはもつともで、むしろ文無しで掃除や雑用に雇ってもらっているだけありがたい。さすがに街で魔王が働くわけにはいかないし……。

先代魔王はどうやってお金を稼いでいたんだろうか……。

考えても埒が明かない。

「さっさと掃除をしよう」

モップの床がけの続きを始めることにした。

## 2 - 2 「デスペナルティ」

掃除も終わり、シャディのいつも作業している部屋へと向かった。

「シャディ、終わったよ」

しかし、シャディの返事はなかった。

「いないのかな？」

ドアを開け部屋の中へと入る。

部屋の中にはシャディはいない。今日はこの場所に来ていないようだった。

外にでているのかな？

シャディはこの部屋で工芸品を作っている。それを定期的に街へと持っていき売っていた。

工芸品を売って生活費を稼ぐ魔王補佐と魔王補佐に雇われて掃除をする魔王。

まったくをもって魔王軍っぽくないよね……（といっても2人しかいないけど）

いったい何の世界に来たのだろうか……  
考えるだけのため息がでる。

城の表口の扉の開く公開な音が城中に鳴り響いた。

シャディが帰ってきたのかな？ でもいつも裏口から帰っていたよな。

それとも誰か来たのかな？

入口の方へと様子を見に向かった。

廊下を歩き表口へ向かう途中だった。

何者かに真後ろから力づくで引きずり込まれた。

とっさに声を上げようとしたが、口を塞がれ声がでない。

振りほどこうとじたばたしても、振りほどくことはできなかった。  
泥棒！？　　まずい、このままじゃ

「しっ、静かにしてください」

聞き覚えのある女性の声。

暴れるのをやめると彼女がゆっくりと手を離した。

後ろを振り返り顔を確認する。

「シャディ、何をしてる」

「大きな声をださないで、見つかったちゃいます」

そう言つてシャディは人差し指を口にあて、静かにするようにジエスチャーした。

状況が全く飲めない。見つかる？

シャディの顔は真剣そのものだった。

「何があつたの？」

もちろんかすれるぐらいの小さな声で聞いた。

「魔王討伐のパーティーです。きっと魔王が降臨したのを知つてここに足を運んだのだと思います」

僕は世界を征服する側の人間。そしてそれを倒すプレイヤーも多く存在することをすっかり忘れていた。

そして、この城は僕とシャディ以外誰もいない。

「それは分かつたけど、何で隠れるの？」

僕は魔王だ。そしてこれはゲーム。役割を全うして初めて魔王として楽しめるのではないのかな？

「それは」

「僕は魔王。そして、いま討伐隊が魔王を探している。出迎えないとゲームとして成り立たないと思う」

魔王なんてやりたくてやったわけではない。でも魔王をやらなければ、この世界に来た意味すら失われる。負けたとしてもただゲームを終えるだけ。ただひたすら家事をこなして生活するだけよりは

いくらかマシだ。

「じゃあ、行ってくるよ」

部屋のドアに手をかけ、向かおうとした瞬間だった。

「だめです！」

シャデイが後ろから両腕で抱きしめてくる。

「シャデイ？」

いつものシャデイと違う態度にとまどった。

「絶対に行ったらだめです……」

シャデイの手はガタガタと震えていた。

「お願いだから……、もう嫌なんです……」

かすれた声でそう言った。

彼女の異常な怯え、何があつたのかわからないけど

「わかった」

こう答えるしかなかった。

シャデイと共に静かに息をひそめ隠れた。

城を徘徊する足音。気づかれないように息を殺し様子をつかがう。

地面を歩く足音と会話をする人の声が聞こえる。

「魔王の城ってここだよな？」

「ああ、そのはずだ」

シャデイの言った通り、僕を狙っている。

シャデイの方へと目をやった。

隣で洋服の裾を離れないように強く掴み、顔を伏せて震えていた。

やがて足音が徐々にこつちへと向かってくる。

シャデイを連れ、柵の隣の空間に身を隠した。

やがて、足音は部屋の前で止まり、扉がひらく。

「ここは……、何かの作業部屋か？」

男の声、顔を確認は無理だが、歩く時の金属音から鎧を着ている事はわかる。

騎士かな？



男は辺りを見渡ししているのかその場を動かさずにいた。

「ここは何もないか……、くそ、誰もいないのかよ！」

男は扉を開け、部屋を出て行く。

肩の力が抜け、大きくため息をした。

それからどのぐらい時間がたったのだろうか？ 1時間、2時間？  
やけに長い時間をその場にたたずんでいた気がする。

「もう行ったかな？」

起き上がるうとする、シャデイがしっかりとつかみ起き上がれなかった。

「シャデイ、もう行ったみたいだよ」

そう言っつて、シャデイの頭を撫でた。

「そうですか……」

シャデイは落ち着かない様子でゆっくりと起き上がる。

「僕も魔王なんだし、怖がらなくてもあのぐらい追い払えるよ」

「無理ですよ。だって、ツヴァイさんは弱いですから……」

「ははは……」

シャデイの言っつとおり、勝てる見込みなんてなかった。魔王だからといってこれといった特殊技を持っているわけでもない。魔法の知識なんてゼロ。

やっつていることと言えば掃除能力と洗濯能力が増えたぐらいだからなあ……。

家事の合間に剣術を練習しているけど、この世界に来た時から現実と感覚は全く同じだった。シャデイの話だと、この世界に来た時ある程度の才能で最初から何かできたりするらしい。本当に魔王になった理由がわからない。

ゆっくりと起き上がりほこりを払った。

「じゃあ、僕は城の様子みてくるよ。シャデイは落ち着くまでゆっくりにしてて」

「あ、あの……」

シャディは背中に触れる。

「うん？」

「ありがとう」

シャディは聞き取れないぐらいの声で言った。

## 2 - 3 「デスペナルティ」

あれから少し経ち、日はすっかりと落ちた。シャディを落ち着かせるために休むことをすすめ、今もおそらく部屋で寝ているだろう。今日ぐらい僕が料理をしないとね。簡単なものぐらいはたぶんできると思う

シャディみたいにすごい料理はできないけど……  
食堂にある食材を使って、適当に調理をはじめた。

「それで、これは何ですか？」

「うう、面目ないです」

勘で作っていたら、自分でもわけのわからない物体になっていた。休養をとって食堂へと来たシャディにふるまったわけだけど、すごくあきれ顔でシャディはそう言った。大きくため息をつき

「何でも食材を放り込めばいいというものではないです。それにこれだけの食材使うのはもったいない」

「はい……、ごめんなさい……」

「でも、がんばってくれたみたいだから、今回は許してあげます」  
そう言って、食べ物を中心に運ぶ。

「ところで、もう大丈夫なの？」

「はい、おかげさまで大分落ち着きました。お見苦しいところを見せてすみません」

「それはいいけど……」

あの怯え方は普通ではなかった。

「次、来たら僕がやつつけるから」

「だめです!!」

木製のテーブルを両手で叩き、城に響き渡るぐらいの大声で言った。

「死んだらおしまいなんです……」

「確かに死んだらゲームオーバーだけどさ、それじゃあ、僕がこの世界で存在する意味がまったくないよ」

この世界でただ逃げ回り、家事をしながらひっそりと暮らす。それはこのゲームにいる存在意義がない事になる。何のためにきたのかもわからない。

しばらくの沈黙。そして彼女が口を開いた。

「この世界は現実ですよ」

「な、何を言っているの？　ここが現実？」

現実？　だつてこの世界は剣と魔法の世界で、現実からCDをもらつてゲームを……

しばらくしてシャディが口を再び開いた。

「私には兄がいました。兄も同様にこのゲームに選ばれました。私と兄はこのゲームに入り、兄は魔王にされ、私は今の職に付きました。ツヴァイさんと同じようにですね。といってもツヴァイさんと違って力も魔法も強くて、最初からお金もいっぱいもっていましたけど……」

「ははは……」

まるで役にたたないと言いたげなとげのある一言。

みんな最初は弱いと思つてたら、やっぱり僕だけ弱い設定だったんだ……。

魔王が弱いのはやっぱりおかしいよね……。

シャディは話を続ける。

「兄は強かったです。配下もいっぱいいました。でも魔王でしかありません」

「魔王でしかない？」

「はい……。ツヴァイさんは他のプレイヤーと魔王の違いがわかりますか？」

「違い……。魔王は他のプレイヤーの敵ということかな？」

「そうですね。魔王は他のプレイヤーの敵対象です。私のような魔王側のプレイヤーもそうですが、魔王だけは一つ決定的に違うと

ころがあります。それは……、このゲームの最終目標が魔王ということですよ」

シャデイの言いたい意図を理解した。

「魔王を倒せばクリア。そして願いが叶う……」

「はい、それは魔王は絶対に叶えられない条件。そして、みなさんは願いのために魔王を殺しに来ると思います」

魔王という存在になった時点でこのゲームでクリアが不可能。でもそれはここへ来た時に分かっていた事だった。

「確かにクリアできないかもしれないけど、せつかくだからこの世界を堪能したいと僕は思ってる。魔法もつかってみたいし」

「そうですね」

「ゲームだし、楽しまなきゃと思う。クリアできないのは残念だけど、やめたくなったときは」

「負けてゲームオーバーになればお終いですか？」

シャデイはうつむいていた。

そして、震えた声でシャデイは言った。

「兄も……、そう思っていました……」

「思っていた？」

「はい、この世界を楽しんで負けたら終わりと言っていました。そして兄は相手に負かされる日が来て、思惑通りゲームオーバーとなりこの世界を追い出されました」

シャデイの話を黙って聞いていた。

「ツヴァイさんはこのゲーム内で一定時間過すと1日だけ現実世界にもどれることは説明されていますよね？」

「うん、確か1週間だったかな？」

「私が現実に戻って何を見たと思います？」

嫌な予感がした。でも聞かずにはいれなかった。

「何を……?」

この問いの答え。最悪の返答が脳裏に浮かぶ。

「兄がこっちの世界で殺された姿そのまま横たわっていました」

「え……?」

その返答が現実となり、その言葉の意味する事を理解するまでに時間はかからなかった。それと同時に戦慄が走る。

僕はもうこの世界から無事には出られない?

この世界で死ねば、現実でも死ぬ?

頭の中でいろいろな考えがめぐる。

吐き気がこみ上げ、頭の中が真っ白になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4451z/>

---

不可死の魔王

2011年12月29日03時23分発行